仁義なき戦い

決戦編

広島やくざ・流血20年の記録

「美能組」元組長
美能幸三の手記より

飯干晃一

Sankei Drama Books

仁義なき戦い〈決戦編〉
広島やくざ・流血20年の記録　530円

昭和48年3月30日　1刷
昭和48年5月25日　10刷

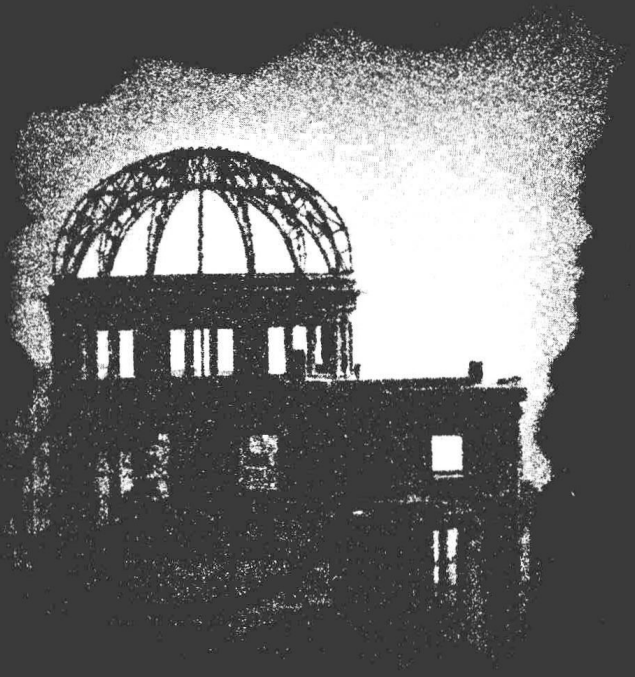
著者　飯干晃一
発行者　小野田政
編集者　白井勝己
印刷　株式会社堀内印刷所
製本　田中製本印刷株式会社
発行　サンケイ新聞社出版局
東京・千代田区神田錦町 3-15
(〒101)
大阪・北区梅田町27 (〒530)

乱丁・落丁はおとりかえします

©飯干晃一　1973 Printed in Japan〈検印省略〉　0095-073784-2756

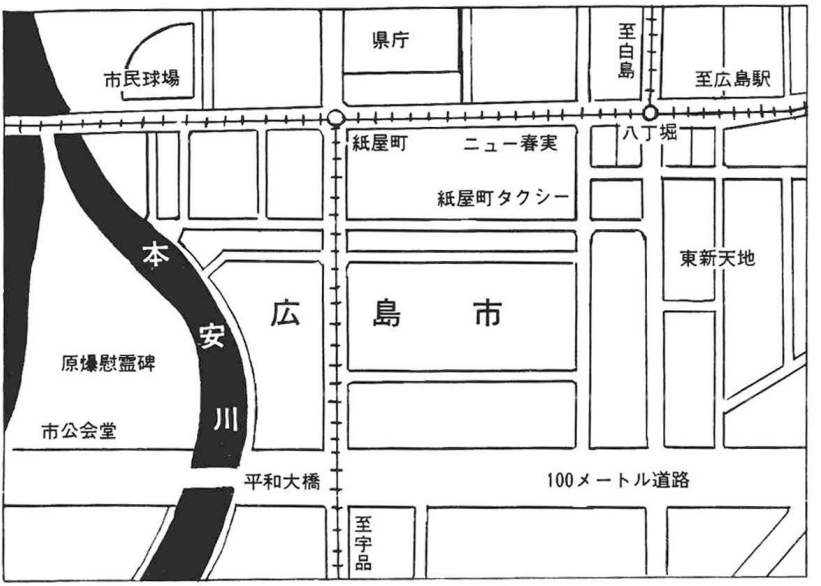
仁義なき戦い〈決戦編〉

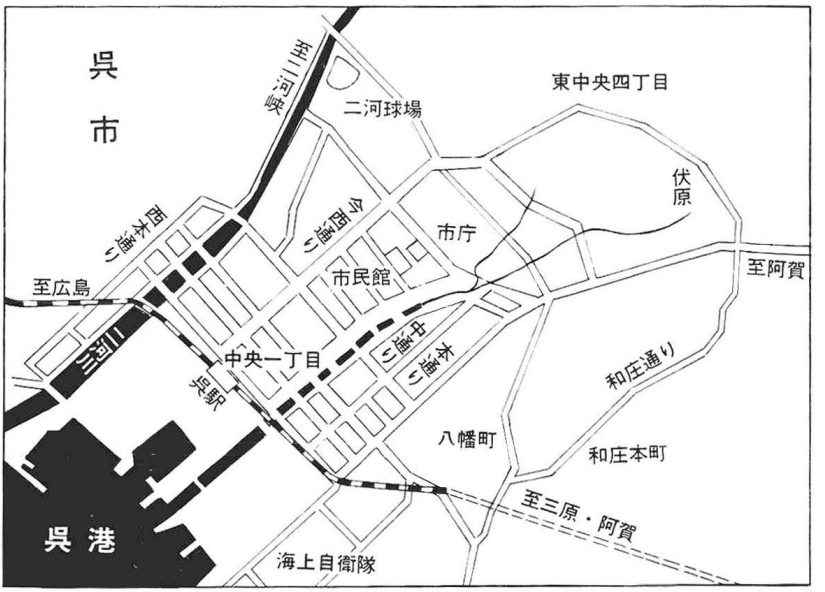
広島やくざ・流血２０年の記録



「美能組」元組長・美能幸三の手記より

飯干晃一


県庁
至白島
至広島駅
市民球場
紙屋町
ニュー春実
八丁堀
紙屋町タクシー
東新天地
本
安
川
広
島
市
原爆慰霊碑
市公会堂
平和大橋
100メートル道路
至宇品


呉
市
東河内駅
二河球場
東中央四丁目
伏原
西本通り
本通り
市庁
市民館
至広島
至阿賀
川原石
中央一丁目
呉駅
中通り
本通り
和庄通り
八幡町
和庄本町
呉港
至三原・阿賀
海上自衛隊

仁義なき戦い〈決戦編〉——広島やくざ・流血20年の記録

目次

1 サカズキ外交 6
2 山口組との結びつき 16
3 山口組の大構想 25
4 山村辰雄の思惑 34

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

5 博多事件 43
6 事態の急転回 52
7 広島の暗雲 61
8 岡組相続の披露 70
9 新生山村組の内情 79
10 打越組の窮地 88
11 張りつめた空気 97
12 山口組の重圧 106
13 打越組から打越会へ 115
14 本多会の出現 124
15 山口組対本多会 133
16 二転三転 142

17 山村組へのクサビ 151
18 美能幸三への破門状 160
19 戦闘の発端 169
20 打越会の優柔不断 178
21 深夜の激突 187
22 打越信夫の立場 196
23 逮捕状 205
24 山村組の攻勢 214
25 戦線の錯綜 223
26 不徹底な終息 232

本文イラスト・森山夏城

1　サカズキ外交

打越信夫の素性

村上組との血みどろの戦いに勝って以来、岡組は、広島での法の裏側における一大王国となった。親分・岡敏夫は文字通り〝広島の支配者〟であった。賭博、競輪場、バー、キャバレーと豊富な資金源を持ち、幹部もまた服部武、網野光三郎、原田昭三、永田重義（岡敏夫の義弟）ら多士済済である。

呉では、抗争の末、山村辰雄が実権を握った。大親分・海生逸一の輩下の恰好で、いまや山村組が呉をしっかりと確保していた。宮島競艇場も山村辰雄のものである。その傘下には樋上実がいる。美能幸三もこの組織のなかにはめこまれた形になっていた。

呉にはもう一つの勢力、小原組があるが、隻腕の親分、小原馨が殺され、弟の小原光男、門広らがいるにすぎない。よその組はすでに没落していた。

これらは、ヤクザ、グレン隊が入り乱れて跳梁した混乱期から、強者のみが生き残ったヤクザ再編成のあらわれであった。同じ盛り場のなかで、三つも四つもの組織が肩を擦り合わせているなかで、領土の争奪戦がおこり、一つの縄張りに一つの王国という時代がやってきたのである。

それにしても未だに中世の戦国時代のように、これは群雄割拠にすぎない。ヤクザの世界も必ずや天下統一の道をたどるに違いない。ヤクザの世界での織田信長、豊臣秀吉、徳川家康は、いったい誰が演じるのであろうか。

広島には、岡組のほかにもう一つの勢力があった。打越信夫を首領とする打越組である。岡組と村上組の抗争の間、打越組は中立を守った。そのおかげで、打越組は勢力を蓄積することができた。

岡組幹部・永田重義は、

「紙屋町（打越信夫）に広島球場の警備をさせたところ、都合のいいときにはうち（岡組）の名を使い、具合が悪いと関係のない顔をするので、このさいサカズキを出して、はっきりさせろと若者を持たしたのが、打越組のはじまりだった」

と、言っている。だから中立といっても、岡組と不即不離の立場であった。

打越信夫もただのネズミではなかった。広島カープの小鶴、三村、金山選手らと親交を持ち、これらの選手の紹介で寿原正一代議士（当時）と知り合った。寿原氏はのちに関谷勝利代議士とともにタクシー汚職事件の収賄容疑で大阪地検の取り調べをうける。

打越信夫が持っていた二台のタクシーが、わずかの間に三十数台に増えたのは、打越信夫の〝政治的手腕〟によるものであったのだろう。

「わしゃこう見えても、広島県で、五本指のなかにはいる名門の出じゃ。ほいじゃけん、なんよう、先祖伝来の土地が何万坪いうてある。東洋工業の松田恒夫社長（当時）は親戚になる。岸本牧場もそうで……」

と、打越信夫はよく自慢していたが、これはみんなウソである。ヤクザたちは打越信夫のことをごんぜんぼうと渾名（あだな）していた。これは広島弁で〝百姓〟と言うことである。いくらホラを吹いても、ヤクザたちは打越信夫の素性をよく知っていた。

打越信夫の配下には、槙松吉紀、福田豊、宮井実、黒川一孔、川本正吾、山脇貞志、山口英弘らがいた。打越信夫も一つの王国を作りつつあった。

美能幸三が打越信夫と知り合ったのは、昭和二十六年五月、広島刑務所内である。

〔美能幸三の手記より〕

十一月のある日、昼の休憩の時、若い者が、

「いま打越さんが、崔（さい）（強盗で十年の刑）をやったる言うていきまいとってです」

と知らせてきた。

すぐわたしが飛んで行くと、なるほどカンカンに怒っている。

「どうしたんかいの」

と聞くとタバコを拾われたと言う。

「わしゃ、上田（強盗で七年の刑）に頼まれとったんじゃ。——タバコを投げこますけん拾うてくれい言うて。それでこいつ（世良五郎）に言うとんたんじゃが、ボサーっとしとるもんじゃけん、崔らに拾われてしもうた。頭へ来たけん、これからやったろうおもうとるんじゃ」

そこでわたしは仲にはいり、相手の崔に話を聞くと、もう二週間も前のことで、あっちこっちに回してほとんどないと言う。それでも残ったひかり七個をひきあげ、それを持って打越のところへ行き、

「どういう話になっとったんかいの」

ときいたら、

「半分貰うようになっとったんじゃ」

と言う。

それで仲にはいった手前、足りないタバコを出してやり、

「じゃ、足したげるけん、上田に持ってっちゃんないや。そうすりゃあんたの顔も立とう。あんたは、ま、喫（す）わんのじゃけん辛抱してつかい」

打越は喜んでいた。これで四方円満におさめたと思っていたら、ヘンな噂を耳にした。

「美能が崔と組んで、打越のタバコをぐじゃぐじゃにしたげな」

わたしは頭にきて、噂の出所をつきとめた。するとなんと言い出したのは打越である。わたしはボロカスに言ってやった。

そうしたら、本人もいっしょに居辛くなったのか、すぐ病舎へはいり、打越は病舎から出所した。

★

昭和三十四年三月、美能幸三が九年半ぶりに出所してみると、この打越信夫はすでに広島でひとかどの親分になっていたのである。

ひとときの平和

山村組の実力者・佐々木哲彦が殺されたのは、昭和三十四年十月である。佐々木によって追放されていた親分・山村辰雄は再び返り咲いた。

その翌三十五年十二月、刑期を終えた岡組の幹部・原田昭三は横浜刑務所から出所してきた。

打越信夫は、この原田昭三に目をつけていた。このころようやく岡組の首領・岡敏夫の健康がすぐれなかった。高血圧と糖尿病である。岡敏夫が引退することは、大いにあり得ることであった。

岡組の後継者と言えば、服部武、網野光三郎、原田昭三の〝三羽ガラス〟のうちの一人である。岡敏夫の義弟の永田重義もダークホースである。しかし、この三羽ガラスは実力が伯仲していて、このなかの一人を選べば、岡組は内紛をおこすおそれがある。三羽ガラスはいわば三すくみの状態でもあった。

打越信夫は、この状況を敏感に嗅ぎつけていた。岡組の跡目相続者が身内からでなく、外部から選ばれるとすれば、打越信夫自身が有力な候補者である。ひょっとすると、おれの掌のなかに岡組の遺産がころげこんでくるかもしれない。その可能性は大いにあるのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

そこで、打越信夫は岡組のなかに、自分の勢力を扶植しておこうとおもいついた。彼はそこで出所してくる原田昭三に目をつけたのである。

原田昭三の出迎えに、打越信夫、網野光三郎、服部武、永田重義、進藤敏明、岩瀬忠雄、三宅時夫、川本正吾、仁井一雄らがずらりとならんだ。美能幸三もそのなかにいた。

「ご苦労さん」

「ご苦労さん」

の声が乱れ飛んだ。

その先頭に立ったのが打越信夫である。出迎えの団長格で、いっさいを切り盛りした。

この出迎えだけでなしに、打越信夫はさいさい獄中の原田昭三に面会に行き、恩義を売っていた。原田昭三は刑務所の門にずらりと並んだ黒い服の男たちに、緊張した顔で最敬礼したが、とくに打越信夫には感謝の目差しを向けた。

打越信夫は、やや薄い髪をぺったりと七三にわけ、あごの張ったいかつい顔に満面の笑みを浮かべ、原田昭三の手をしっかりと握ったのである。

打越信夫は広島に帰ってくると、中古の外車を原田昭三に贈り、そのうえ嫁の世話までするという力の入れようであった。

このような情勢を、山村辰雄が気がつかないでいるわけではなかった。山村辰雄のため九年半も勤めに行っていた美能幸三に、わずか四十万円しか出さなかった渋い山村辰雄が、原田昭三の出所祝いに百五十万円をポンと出したのも、やはり打越信夫と同じことを考えていたからである。

しかし、山村辰雄は、大金を投じたことが惜しくてならなかった。

〔美能幸三の手記より〕

ある晩である。山村がわたしを呼んだので、なにかあったのかと思っていたら、原田昭三のことであった。

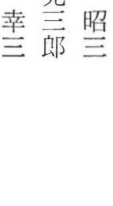
「おい、あの昭いうやつは、ほんと馬鹿じゃのう。馬鹿じゃ言うたら馬鹿じゃ言うたら、

あんとな馬鹿はおらんわい」
「なんかあったんですか」
と、わたしは聞いた。
「じつは、なんよう。あれ（原田昭三）が出たけんいうて、岡（敏夫）がなんもしたらんもんじゃけん、ワシが見るに見兼ねてわずかじゃが出しちゃったんじゃ。それを、ま、どうしとるかおもうて、調べさしたところが、女にみな注ぎ込んどりやがるんじゃ。馬鹿じゃ馬鹿じゃ言うたら、話にならんわい。ま、これでようわかったよ。岡が何故したらなんだ言うことが」
「はあ、ほうですか。それでなんぼ出しちゃったんですか」
百五十万円というのはわかっていたが、わざととぼけてきいてやった。
山村は、金額をきかれて、はっと気付いたのであろう。
「いや、ちょ、ちょっとよ」
と逃げた。わたしの手前、言えなかったのだろう。
しかし、惜しがって、このあと、原田の悪口ばかり言っていた。

★

原田昭三に金を出すには出したが、出した金を惜しがっていた山村辰雄と違って、打越信夫は着着と手を打っていた。昭和三十六年二月、広島での原田昭三の放免祝いの席で、岡親分の肝煎りで、美能幸三と原田昭三は兄弟分のサカズキをした。
打越信夫は岡敏夫の舎弟である。ついでに美能幸三も原田昭三も、打越信夫の舎弟のサカズキをしたらどうかという話になり、遅れてきた網野光三郎も、まだ打越信夫とは他人だということで、

兄弟



と、三人いっしょにサカズキをした。

打越信夫は、得意満面であった。彼は岡敏夫の跡目相続者に一歩も二歩も前進したのである。

佐々木哲彦が死んでから、呉・広島のヤクザ社会はひとときの平和であった。はげしかった縄張り争奪戦はほぼおさまり、序列の確定になったのである。いわばサカズキ外交のはじまりである。

顔のひろい網野光三郎の奔走で、美能幸三、服部武、原田昭三、永田重義らは各地のヤクザと兄弟分のサカズキを交わした。これも平和と安定への道であった。

昭和三十六年六月までに、美能幸三らが兄弟分のサカズキをした相手は、吉田友三郎（徳島）、平井竜男（小松島）、伊藤清一（桑名）、坂田宗吉（大阪）、久保久義（大阪）、らであった。九月には、美能幸三は小原光男と兄弟分になった。

山口組の進撃

昭和三十五年――。

この年は60年代のはじまりとして画期的な時期であった。

安保条約をめぐって世相は騒然とし、昭和三十五年六月十五日、国会前でデモ中、樺美智子死亡。学生運動の将来に不吉な予感を与えたた。七月十九日、池田内閣成立。十月十二日、浅沼社会党委員長刺殺さる。

この三十五年から昭和三十六年まで、呉と広島の地下の王国は、束の間の平和を味わっていたが、日本のヤクザ社会は、統一と再編成に向かって激動の時を迎えつつあったのである。

その第一歩を踏み出したのが、神戸・山口組である。その頭領こそ山口組三代目・田岡一雄であった。

源平時代に福原の都と呼ばれた神戸も、幕末は一寒村にすぎなかった。だが安政五年、幕府が兵庫の開港を認めると、神戸は急速に発展した。

清国を破った日本は、先進資本主義諸国に追いつこうとする。日露戦争後はさらに急テンポにな

り、明治末期から大正にかけ、神戸はいまのミナト・コウベの基礎をつくる。神戸には各地から労務者、手配師、船員、技術者が溢れ、煮えたぎる大釜となった。この新興都市はヤクザにとって住み心地のよいところとなった。

原爆で徹底的に破壊された広島が、再建のため多くの労務者を必要とし、ヤクザ、グレン隊の温床となったのとよく似ている。ちょうどシカゴが西部の荒野をめざす開拓者、毛皮猟師、カウボーイでごったがえし、売春と賭博、富くじとウイスキーでにぎわったのと同じである。

九州〝川筋ヤクザ〟の伝統を引く大島組親分・大島秀吉が神戸に君臨した。大正四年、その配下の手配師・山口春吉が、苦節九年、山口組の看板をあげた。これが山口組初代親分である。

大正十四年、山口登が二代目を襲名、神戸中央卸売市場の利権を獲得、浪曲、相撲などにも手を伸ばした。広沢虎造の興行権をめぐり下関の籠寅組と抗争、昭和十五年、山口登は東京・浅草で襲われ重傷、それがもとで昭和十八年死亡した。

昭和二十一年秋、山口登の若衆であった田岡一雄が、戦後の混乱期に山口組三代目を襲名した。

神戸には山口組のほかに、本多会、大島組、五島組、西海組、小田組、中山組などがそれぞれシノギを削っていた。

これら神戸の地下の王国のなかで、山口組三代目は非凡な力量を発揮し、神戸港の船内荷役を独占、興行にも強力な支配権を確立した。山口組は日本最強最大のヤクザ組織にと成長した。

昭和二十五年、神戸競輪場の警備をめぐり西海組と抗争、昭和二十八年、鶴田浩二襲撃事件、昭和二十九年、新開地で谷崎組と抗争、昭和三十二年、徳島進出、昭和三十三年、高知進出、別府・石井組を傘下に吸収、昭和三十四年、悪名高い大阪・柳川組を山口組戦闘団に組み込んだ。

昭和三十五年四月、大阪ミナミのサパークラブ「青い城」で、山口組三代目の目前で、グレン隊明友会が暴行事件をおこしたため、山口組戦闘団

は疾風のような明友会殲滅作戦をおこし、地道行雄指揮のもとに、明友会を撃破し、大阪の縄張りを奪い、山口組全国制覇の最初の進出をなしとげた。

山口組戦闘団は、四方面軍にわかれていた。地道行雄の率いる地道組は山陰、四国、九州を狙い、菅谷政雄の菅谷組は南紀、北陸、横浜、九州に進出しようとし、小西音松の小西組は紀和、伊勢、中京、北陸を目ざし、柳川組は北陸、中京、山陰、信越を経て長駆、北海道に転戦しようとしていた。

山口組戦闘団の進むところには、銃声が鳴り響き、白刃がきらめいた。

中世さながらに、山口組三代目は日本の地下の王国群を一大帝国に統一しようとするすさまじい野望を心に秘めていたのである。この山口組の驀進をくいとめようとしたのが、同じく神戸に本拠をおく本多会である。

日本の首都・東京にも名のある親分衆はひしめいていたが、政治家や実業家のご機嫌をうかがって、多くの兵力を持たず、もっぱら政治的な権謀術数で保身につとめていた。山口組三代目にとって、彼らはおそるるに足りなかった。包囲し、分断すれば、東京の親分衆はそのうち軍門に降るだろう。

しかし、本多会は違う。ことに本多会の軍団を指揮する平田勝市（のちに本多会二代目会長）は戦闘的な性格で、山口組の全国制覇に待ったをかけるように、双手をひろげて立ちはだかっていた。

昭和三十六年六月、殺し屋・柳川組は奈良に進出、小西組、菅谷組、柳川組の各軍は和歌山、滋賀、三重を侵略した。

昭和三十六年三月、山口組遠征軍は山陰道に進撃、本多会はこの情勢を捨てておけないと判断、急きょ防衛にまわったが、立ち遅れて、山口組戦闘団は無人の野をゆくように山陰をじゅうりんした。

山口組三代目・田岡一雄は、次はどこを狙うだ

ろうか。首都を手中にするためには、地方を全部制圧しなければならぬ。広島こそ、山口組にとっても、本多会にとっても譲ることのできぬ一大戦略地点であることは、誰の目からみてもあきらかなことであった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com